

人の手によって守られる植物

—加須市・浮野の里における絶滅危惧植物ノウルシの保全—

木山 加奈子

はじめに

去る4月11日(土)、観察会「浮野の里で湿原の春をさがそう」を開催しました。その目玉が、ノウルシ (*Euphorbia adenochlora*) でした。

ノウルシは、湿地に生えるトウダイグサ科の多年草で、4月ごろに独特の黄色が目を引きまます。この黄色い花のように見える部分は、葉が変化した苞葉(ほうよう)という構造です。じっくり観察すると中心に小さな花(写真の赤い矢印の先)がついていることがわかります。



観察会ではたくさん見る事ができましたが、埼玉県のレッドデータブック(以下RDB)で絶滅危惧Ⅱ類(VU)に、環境省のRDBでも準絶滅危惧種(NT)に指定されている希少な植物です。

そんな希少な植物が、なぜこれほどまでに群生しているのでしょうか。それは、人がノウルシの好む環境を維持しているからなのです。その取り組みについて、取材した結果をご紹介します!

浮野の里におけるノウルシ保全の取り組み

通常、時間がたつと浮野の里のようなヨシ原は次第に森林へと移り変わって乾燥し、湿地を好むノウルシは暮らせなくなってしまいます。この移り変わりを止めてヨシ原を維持するために、地元の方々を中心とした市民団体「浮野の里・葦の会」が、年に一度ヨシ焼きを行っています。

ただ火をつければいいのかと思いきや、そうではありません。ヨシは冬になると地上部が枯れてしましますが、立っているヨシは意外と燃えにくいのです。そこで、事前に刈り倒しておく必要があるのですが、これが結構骨の折れる作業です。また、火を扱うので地元の消防署とも連絡を取り合います。

これだけ準備をしても、ヨシ焼き当日まで、実施できるかどうかはわかりません。風が強すぎると実施できないのです。逆に、風が弱すぎても燃え広がらないのでうまく焼けません。

火は、複数個所に火炎放射器で点けます。点いた炎は風が吹くと一瞬で燃え上がり、時には約5mもの高さに達します。

ヨシ焼きの跡は下の写真中央のように真っ黒焦げの野原です。これからわずか3か月ほどでこの場所がたくさんのノウルシに埋め尽くされ、写真右のような鮮やかな黄色に染まることになるのは、実に驚きです!

(きやま かなこ・学芸員)



点いた火が燃え上がる様子



焼けた後のヨシ原(1月)



ノウルシの群生(4月)